

新生児の行動発達に関する日米比較研究

高橋悦二郎（日本総合愛育研究所）

加藤 忠明, Thomas Brazelton（日本総合愛育研究所）

渥美真理子（東海大学精神科）

健康な乳幼児の発達を種々の国々で比較することを目的に、T. Berry Brazelton, 小林登所長らとプロジェクト研究を進めている。今回はその研究中の一部のデータをまとめ、日本の新生児の発達をアメリカの新生児と比較した。

対 象

愛育病院出生の20例(昨年の報告とは別症例)と東海大学病院出生の7例で、男児13人、女児14人の合計27人である。第1子18名、第2子6名、第3子3名であった。厳密な基準で妊娠出産に問題がなく、かつ健康な児を生後3日目に選び出した。

方 法

生後3日目にObstetrical Complication Scale (Littman & Parmelee) とブラゼルトン新生児行動評価(以下NBASと略す)を出産した病院で評価し、退院時にPostnatal Complication Scale(Littman & Parmelee)を採点し、生後10日目に家庭訪問を行ないNBASを評価し、さらに生後30日目の1カ月健診時にNBASを施行した。評価は加藤, Brazelton, 渥美の3名で行ったが、1人の新生児については同じ検査者が評価し経過観察した。NBASの結果は、Seven Clusteringを行ない、慣れの現象、視聴覚刺激への反応性、運動能力、状態の変化性、状態の調節能力、自律調整能力、神経学的反射に分類し、生後3、10、30日の変化を評価し、上記2種のComplication Scaleと比較した。米国の資料は、児を選び出す基準が我々の基準とmatchしている60例のSeven Clusteringの平均値を使用した。

結果と考察

Obstetrical & Postnatal Complication ScaleとNBASとは有意な相関は見出されなかった。健康

な新生児に関しては、ごく軽度の妊娠出産異常は新生児の行動能力に影響を与えないと考えられる。

NBASのSeven Clustering値の生後3、10、30日における平均値を表に示す。参考としてmatchした米国新生児での値を括弧内に示す。

慣れの現象に関しては、新生児期を通して著変はなかった。米国との比較では、前回の報告と同様、米人の方が刺激に慣れやすい傾向がみられた。

視聴覚刺激への反応性に関しても日本人では新生児期を通して著変はなかった。新生児の追視を原始反射とみる考え方もあるが、我々の検査では、新生児が最良の状態を観察すれば、新生児期を通して60度前後の追視が可能であった。米国の新生児は、前回報告と同様、生後数日は日本と比べ反応性が低い傾向にあったが、日齢とともに上昇していた。このことは、米人の方が遺伝的または出生前後の環境が悪くてもそれが回復してくるという考え方とともに米人新生児の養育環境の日本との相異が考えられるので、今後検討していきたい。

運動能力に関しては、生後3、10、30日と経過するに従って上昇する傾向が認められ、生後3日と30日では危険率0.01%で有意差が認められた。この運動能力の発達は、筋緊張、運動の成熟度、座位への引き起こし、防御運動、活動性と項目別にみても、また、3人の検査者別に評価しても同様の傾向が認められた。米人新生児でも同様に発達する傾向があった。

状態の変化性に関しては、生後の日齢とともに評価が低くなる傾向が認められたが、検査者別の集計では必ずしも一致がみられなかった。

状態の調節能力に関しては、生後10日の家庭訪問時と生後30日の健診時とで有意差($p < 0.0001$)が認められた。抱いた時の反応、泣いた時にどうあやすと泣き止むか、自己鎮静の能力、手を口にもっていく能力

と項目別に評価しても、また、3人の検者別に集計しても同様の傾向が認められた。健診の場など、いつもいる所と違う場所で検査されれば、新生児でも緊張して状態の調節能力が悪くなると考えられる。また米人新生児と比較しても日本の家庭訪問時の評価は良い傾向であった。

自律調整能力に関しても日齢によって差は認められなかった。米国の資料は一部信頼性に乏しかったので省略した。

反射に関しても生後の日齢による差は認められなかった。健康児を対象に検査したためと考えられる。

表 NBASの Seven Clustering Scores

日 齢	3 日	10 日	30 日
慣れの現象	5.45±1.07 (5.7)	5.25±1.03 (5.9)	5.67±1.58 (6.0)
視聴覚刺激への反応性	7.10±1.06 (6.5)	7.27±0.96 (6.7)	7.40±0.76 (7.9)
運 動 能 力	* 5.49±0.61 (4.9)	5.72±0.45 (5.4)	* 6.07±0.31 (5.9)
状態の変化性	4.13±0.49 (3.9)	3.81±0.99 (4.1)	3.65±0.86 (4.2)
状態の調節能力	5.95±1.07 (5.7)	* 6.26±0.99 (5.3)	* 5.23±0.93 (5.1)
自律調整能力	6.53±0.96 (6.2)	6.18±1.09	32±0.92
神経学的反射	0.96±1.25 (1.3)	0.55±0.69 (1.2)	0.77±0.97 (1.5)

* : p<0.0001



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



健康な乳幼児の発達を種々の国々で比較することを目的に,T.Berry Brazelton,小林登所長らとプロジェクト研究を進めている。今回はその研究中の一部のデータをまとめ,日本の新生児の発達をアメリカの新生児と比較した。